

占領軍 GI、O.W. フロストが語るミス・デントン⁽¹⁾ 1945-46

坂本 清音

はじめに

1 筆者 Orcutt William Frost について

この日記の筆者 Orcutt William Frost (1926～) は、ミネソタ州生まれの歴史家、教育者である。特に辺境の文化に興味を持ち、10年以上アラスカの大学で教えながら、エスキモーの歴史やロシア系アメリカ人の研究をした。その前には、イリノイ大学の博士課程では Lafcadio Hearn (小泉八雲 1850-1904) をテーマに選んで研究し、*Young Hearn* を出版(邦訳は 1958 年) した。1969-70 の 1 年間、名古屋学院大学交換教授として来日している。

最も早い日本(京都)との接点は、第 2 次世界大戦後、GI として来日したことに始まる。1944 から 46 年にかけてフィリピンと日本で兵役に服したが、1945 年 12 月から 46 年に兵役を解かれて帰国するまでの 1 年弱は第 8 軍団兵士として京都に駐屯した。その間に、軍の要請もあって、デントン・ハウスをしばしば訪ね、手記を残した。

除隊後、ミス・デントンの親友ミス・ボスビシエル(日記①参照)に出した書簡⁽²⁾の中で、戦後京都でのミス・デントンを取り巻く状況をつぶさに知らせたのちに、自分は今、イリノイ大学の 1 年生で宣教師になるための準備をしていることを告げ、いつか同志社に英語教師として戻る可能性はあるだろうかと尋ねている。さらに、在日中には日本人の牧師を助けて大人や子供のための聖書研究会や英語の勉強会をしたので、日本人は大好きだし彼らが必要としているものが分かっていること、今は、生涯の仕事

として、神のことを知らない人々に聖書の知恵やイエスの愛を教える仕事に就くこと以外は考えられないと語っている。そう思うのは、伯父の一人は連邦教会会議書記であるが、かつては日本への宣教師を希望していたこと、現在、遠縁の伯父2人が宣教師としてインドに派遣されていること、筆者の母も長い間、中国で医療宣教師になりたいと願っていたことなどを述べて、ミス・ボスピシエルの助言を求めている。

結局、帰国後のイリノイ大学での専攻は文学と歴史になったようであるが、ミス・デントンを何度も訪ねている間に、彼女の生き方、人となりに変な感銘を受けた。日記の中でも、いつも日本人の良さを語るデントンの言葉を引用しつつ、「ミス・デントンこそ、真に素晴らしい女性である」（日記④）と讃えている。夫人 Mary によると、生涯、彼女の思い出を語っていたとのことである。

2 手記の由来

この手記は、Orcutt William Frost が GI として日本在留中に米軍の委嘱を受けて記録した記事のうち、特にミス・デントンに関係する項目を、筆者の妻 Mary B. Frost とミス・デントンの姪孫 Susan Silfvast（以後 Sue と記述）とが抽出して送ってくださったものである。筆者が老齢で闘病中なので、例えば、デントン・ハウスに同行した、筆者の同僚の兵士についての詳細などがもはや記憶にないのは残念であるが、手記とともに送付された写真（一部を口絵 i に掲載）は大変貴重であり、戦後占領時代の日本（京都）を写す記録である。

これまでのミス・デントンの伝記においても、戦争中の悲惨な体験⁽³⁾とともに、戦後 GI の訪問によって最晩年の彼女に訪れた、一時の恵まれた境遇についての簡単な記述はあるが、これほどリアルに具体的に GI と交わしたやり取りが記録されたものはなかった。デントンが無意識にこぼす、母国に対する本音の思いには彼女が長年秘めていたホームシックが偲ばれ

るし、また日本人のことを Jap と呼んで欲しくないとか、帰国目前の Jack に日本国民に親切にするようにマッカーサー元帥に頼んで欲しいと依頼する言葉には、とことん日本人思いの気持ちが伝わって来る。

最後に、この手記の発見には、不思議な力が働いたことも書き留めておきたい。実は Sue がカリフォルニアからオレゴンに移った 2 年前から、Mary と Sue は P.E.O. (Philanthropic Educational Organization) の支部組織を通して知り合っていた。しかし、二人の間に、ミス・デントンという共通軸があることに、2016 年 1 月 22 日までは全然気がついていなかった。

Sue は、その日の P.E.O. の集まりで「これまで生きてきた道」を語る順番が当たっており、「特に栄誉として印象に残っている出来事」の一つとして、2007 年に大伯母ミス・デントンの生誕 150 年を記念して同志社同窓会から招待された日のことを話そうと考えていた。しかし、ほとんどの人にとってミス・デントンは未知の女性なので、勲章とガウンをつけた写真 1 枚だけを見せながら手短かに話すことにしていた。ところが、「ミス・デントン」について語り始めると、聴衆の中に「えっ」と息をのむ気配がした。話し終わるとすぐに、それが Mary であり、戦後、ミス・デントンを訪ねた GI の一人が彼女の夫 Jack⁽⁴⁾であること、しかも彼が軍の命もあって日記としてミス・デントンのことを記録していたことを知ることになる。

その日、Sue がミス・デントンに触れなかったら、Mary がその場になかったら、Jack が日記に書いているだけでなく、デントンとの思い出を日頃口にしていなかったら、この日記が日本で陽の目を見ることはなかっただろう。幾つもの偶然が重なって、今回の資料紹介に繋がったことに驚いている。

注

- (1) Mary Florence Denton (1857-1947) ミス・デントンは同志社女子部を世界一の学校と言って熱愛し、来日以来 60 年間、太平洋戦争中も帰国せず、デントン・

ハウスに留まった宣教師である。この日記は、老齢と貧窮の中で過した戦時下、日本での4年の後、彼女の最晩年に訪れた心身共に恵まれたひとときの記録である。

- (2) O.W. フロストが除隊後、イリノイ大学1年生であった時に、ミス・デントンと交わした会話を思い出して、ミス・ボスピシエルに宛てて書いた手紙は、Sueの父で、ミス・デントンの一番下の弟 Loney Denton によって保存されていた。この書簡のおかげで、多くの注記ができたことは幸いであった。
- (3) ミス・デントンが経験した戦争中の悲惨な体験については、「戦時下のデントン日記」(『同志社談叢』17、1997)「Miss Denton's Diary (1935, 1936, 1937, 1943)」(『同志社談叢』20、2000)「ミス・デントンから荒木和一への手紙」(『同志社談叢』23、2003)「M. F. デントンに関する新資料 ―遺言・死後叙勲・生年について―」(『同志社談叢』29、2009)を参照されたい。
- (4) Orcutt William Frost が何故 Jack という呼称で呼ばれるかについて Mary に尋ねたところ、英国の民話伝承に由来することが分かった。その民話には Jack Frost という寒さを象徴する霜の妖精がおり、秋から冬にかけて家々の窓ガラスや木々の葉を frost と ice で彩る。この民話はアメリカにも伝わって来て、姓が Frost の場合、Jack という呼称を用いる人が多いという。“Orcutt” というのは、もとはスカンディナヴィア系の姓で5世紀～9世紀に英国に伝わって来たが、こどもの名としては大層すぎることもあり、同名であった彼の父も、彼自身も幼少の頃から Jack と呼ばれていた。

謝辞：日記の筆者 Orcutt William Frost 氏と、Frost 氏の日記の中から、協力してミス・デントンに関する記述を抽出して送ってくださった夫人の Ms. Mary Frost と、ミス・デントンの姪孫 Ms. Susan Silfvast 並びに日記②に登場する大岡義政司祭のご子息大岡義明京都聖ヨハネ教会名誉牧師に心から感謝申し上げます。氏は当時聖ヨハネ教会の礼拝に出席するのみならず、司祭一家と家族同様の交際をしていた Frost 氏ら GI の詳しい情報を提供して下さいました。

ジャックの日記

① 1945年京都でのクリスマス

〈同志社レディ〉第6軍¹⁾のクワイアーは一人ずつ足音を忍ばせて、同志社女学校の校舎の後ろにある小屋²⁾に1列縦隊で入って行った。その小屋の一つの部屋には、たった一つの明かりが、天井からかすかに光を放っており、大変年老いた白人の老婆が枕を背にベッドに横たわっていた。この老婆はカリフォルニア出身で、日本でもう57年³⁾を過ごしていた。

このアメリカ人は今では歳をとり、足が不自由になって耳も少し遠くなっていたが、聖歌隊員が半円になって歌を歌うのを耳を澄まして聞き入っていた。賛美歌を一曲歌い終わるごとに、しゃがれ声ではあるが、感謝と称賛を込めて、「素晴らしい！素晴らしい！」と叫んだ。

ただ1度だけ別の言い方をしたことがあった。その時はにっこり微笑って、いたずらっぽく「私は昔から男性コーラスが好きだったの！」と言った。

② 1946年2月25日、京都

〈同志社コンサート〉日曜午後、大岡牧師¹⁾と令嬢が同志社大学²⁾で行われたバイオリンとピアノのコンサート³⁾に、エイブ⁴⁾と私を連れて行ってくれた。会場には約500人の日本人聴衆がいたが、GIは4人しかいなかった。座席は日本人サイズで作られており、エイブと私にとってはとても窮屈で足を伸ばして座ることができなかった。演奏曲目はブラームスとモーツァルトとベートーベンであった。バイオリニストの巖本真理⁵⁾はドレスの上にセーターを着てかわいらしかった。プログラムが終わる前に、大岡夫人が傘を2本持って飛び込んできた。雨が降り始めていたからである。夫人は、私たちが濡れないようにと満員電車に乗って、2マイルの距離を家から持ってきてくれた⁶⁾のだ。

③ 1946年5月17日

〈ミス・デントン〉ヘンライン大佐¹⁾と私は、ウッドラフ少将²⁾の命を受けて5月17日同志社大学にミス・デントンを訪ねた。自分は1858年³⁾7月14日にカリフォルニア州で生まれたと話してくれた。彼女はキリスト教教育のために生涯を捧げようというはっきりとした目的を持って日本に来ていた。1888年のある日⁴⁾の午後京都に着き、翌朝には同志社で初めての英語のクラスを教えた⁵⁾。当時の同志社の生徒は100名もいなかった。ミス・デントンは同志社の創立者、新島襄を知っていたが、彼は大変若くして死んだ⁶⁾。当時の同志社の部長(のちの学長)岡田氏⁷⁾は、ミス・デントンに「多くの良きこと」を教えてくれた。彼女はこの2年間、「神経系の病気」で床に臥していたが、学校や教え子や教師のことはいつも懐かしく思い出していた。来日以来58年間に1度だけ⁸⁾帰国した。ニューヨーク州には親戚がたくさんおり、彼女は「熱心な共和黨員」であり、アメリカ人の兵士と「その美しい青い目」が好きだと言った。

ミス・デントンには今度の戦争の原因が分かっていず、「日本人は多分アメリカ人を妬んだから」と思っているようだった。1941年にアメリカ人すべてに帰国命令が出た時にも、彼女は日本に留まることを選んだ。日本と日本人が大好きだったからだ。アメリカ領事⁹⁾も最初は帰国しないのは愚かなことだと説得しようとしたが、本人の熱意を理解すると、「神のご加護があるように」と述べるのみだった。

この年¹⁰⁾のクリスマスのすぐ後に、ミス・デントンは窓辺のベッドに臥していた時に地震を感じた。次の瞬間、毛布ではないが、何か重いものが被さったと思った。後になって、それは長年の世話人、星名夫人¹¹⁾が、万一窓ガラスが割れて破片がミス・デントンに刺さるといけないので、盾になろうと彼女の身体の上に身を投げ出したのだと知った。「このような献身をずっと来日以来、自分は日本人から受けてきた。日本人は大変わか

りやすいし、『大変素朴』である」と彼女は信じている。デントンには、日本料理の「すき焼き」こそ、世界に通用する食べ物だと思っているのに、「女生徒たちは西洋料理を習いたがる。それで、外国の兵隊さんに料理をしてあげたいと思っている」のだと言った。

④ 日付なし

〈ミス・デントン〉私はサトウニンジン種の種と『リーダーズ・ダイジェスト』¹⁾を、トミー²⁾はトマトジュースと冬用のパジャマを持って行った。ミス・デントンは、「こういうパジャマこそ欲しかったの」と言い、「星名さん、星名さん。明日はこの素敵なパジャマを着せてくださいね。日曜ですもの」と大声で言った。また「ここに食料を持ってきてくださって、あなたたちはお困りになりませんか」と尋ね、この食料は星名夫人も必ず一緒に食べるように伝えて欲しいと言い張った。次に、自分の写真（口絵 ii 参照）と日本のクリスマス・カードを1枚ずつ私たちに渡し、「同志社」の意味³⁾を教えてくれた。それは一つの志、すなわち「神に御栄えがありますように」という意味だそうである。私はこれまでにこれほど疑うことを知らず、信仰と宗教心に燃える女性に会ったことがない。いつも日本人の友人について話し、「毎日毎日、日本人の性格の美点に気づくのですよ」と言うのだ。ミス・デントンこそ、真に素晴らしい女性である。

⑤ 1946年6月3日

〈日本の教会での礼拝〉エイブとトムと私は京都の北に位置する末光牧師¹⁾の小さな教会²⁾に行った。(末光牧師はミス・デントンの世話をしている星名夫人の弟である)。この牧師はマサチューセッツ州の神学校³⁾で3年過ごした。主日礼拝が行われたのは、ミス・デントンの寄付でできた小さな教会学校⁴⁾の一室であった。出席者は20名ほどしかいなかった。末光牧師の説教はもちろん日本語であったが、ありがたいことに、説教の

合間にしばしば要点を英語で言ってくれた。感心したのは、この少人数の礼拝で、誰もが何かの役を担っていることだ。若い女性は賛美歌斉唱のためにピアノを弾き、京都大学生の青年は聖書を読んで祈祷を捧げた。礼拝が終わると、みんなで座っていた椅子を片付け、教会を出るときには、円形に並べた小さな幼稚園児用の椅子に置き代わっていた。

⑥ 1946年6月8日

〈ミス・デントン〉今日は、ビタミン剤、点鼻薬、咳の薬と神経安定剤を一種類届けに行った。ミス・デントンを診察後に軍医が勧めた薬剤である。薬を調達できるのは、主としてウッドラフ少将の心遣いのおかげ¹⁾と伝えた。ミス・デントンは「ご厚意に心から感謝します。私に会いに来てくれるアメリカ兵はみんな好きだし、日本が大好きなの。でも、ほんの少しだけアメリカの方が好きと伝えてくださいね」と言った。

⑦ 1946年6月16日

〈同志社教会¹⁾での説教〉6月16日、エイブと私は日本語の説教を聞くために、同志社栄光館のファウラー・チャペルに行った。まりの博士²⁾の説教は辛うじて所々聞き取れたが、日本語は3ヶ月では到底学べないことはよく分かった。礼拝中に賛美歌を5曲歌った。どれも知らない曲ばかりだったが、賛美歌集を見て、メロディーだけは口ずさむことができた。礼拝後、まりの博士はエイブに流暢な英語で話し掛けられた。3年間イエール大学に留学していたそうだ。礼拝出席者は、10代の女生徒が約100人、男子生徒は25人、それに大人が25人いた。礼拝中そわそわと落ち着きのない人は誰もいない。ずーっと静かに聴いていることに感心した。これは日本の学校全てで課せられる厳しい訓練のせいだと思う。日本の学生は自分の個性や将来よりも、学校の体面を重んじることに意を用いているのだ。

⑧ 1946年7月4日

〈ミス・デントンの誕生日〉今日アメリカの独立記念日はミス・デントンの誕生日でもある。今日で88歳¹⁾だ。トムとエイブと私はささやかなパースデー・カードを書き、彼女の好きな作家の作品、シェクスピアの小型本を持参した。行ってみると、多くの人がその日を覚えて訪ねてきていた。部屋中に美しい花束があり、机の上にはプレゼントの山があった。

⑨ 1946年7月13日

〈家庭科の料理帳〉7月13日土曜の午後、友人のジリック¹⁾を連れて、ミス・デントンに逢いに行った。彼女はどんどん物忘れがひどくなっている。いつも「私の兵士たち」に本を借りて行くようにと勧めるのだが、私たちには立派な軍用の図書館があることをもちろん知らないのだ。同志社女学校で家庭科の先生²⁾であったミス・デントンは、生徒のノートを数冊³⁾見せてくれた。生徒たちは食べ物の広告を切り取って貼り、大変苦勞して書き写した英語のレシピを説明するために、実に芸術的なスケッチや画を描いていた。「日本の女生徒は兵隊さんに料理を作ってあげたいので、西洋料理の勉強をしたがる」とミス・デントンは言った。

⑩ 1946年7月19日

〈ミス・デントンへの土産、コーンフレークス〉7月19日土曜の午後、トムと私はワリー¹⁾を連れてミス・デントンに会いに行った。以前にロスアンジェルス出身の兵士を知らないかと尋ねられていたので、ロス出身のワリーを連れて行ったのだ。彼女はロスの公立学校の校長であるミス・メリー・ヘンダーソン²⁾という人の住所をワリーに渡し、戦前、ヘンダーソン校長はミス・デントンが同志社女学校の家庭科で使う料理の本を集めてくれた人だと話した。またワリーにミス・デントンの母教会であるロスの会衆派教会³⁾を訪ねて、戦時中日本に留まる決心をしたことを後悔したこ

とは一度もないと伝えてくれるように頼んだ。さらにロスには彼女の姪や甥が数人いる筈だが、親戚がどこにいるかももう分からないとも話した。

私はミス・デントンのために持参した袋を渡して、中身はシリアルだと伝えた。よく理解できなかつたようなので、袋を開けて、コーンフレークの小さな箱を取り出した。彼女はコーンフレークを見るとすぐに大喜びで手をたたき、大変興奮して「わおー コーンフレークだ！星名さん来てください。星名さんどこにいますか」と叫んだ。「はい、はい。デントン先生」と走ってきた星名夫人に「ご覧なさい！今夜の夕食はこれにしてください！」と言って、ライスフレークとシレッデッド・フィート・ビスケット⁴⁾の箱を取り出した。子供のように興奮し、「シレッデッド・フィートで涙が出るなんて思ってもいなかったわ」と大笑いした。ミス・デントンは冷たいシリアルが好きなのだ。なぜなら、米と小麦から冷たいシリアルを1品、工夫して作り上げていたからだ。

エイブとトムと私は軍隊の食事の中からシリアルを1箱ずつ集めていた。ミス・デントンは続けて「いつも星名夫人に話すのだけど、私は日本で一番栄養のあるものを食べているのよ。だってアメリカ軍に養ってもらっているのですもの」と言った。(彼女は毎週、魚と果物の配給をもらっている⁵⁾)。今は、星名夫人の義理の娘⁶⁾がデントンの世話を手伝っている。2児⁷⁾の母親だが、父親⁸⁾は満州にいる。

⑪ 日付なし

〈ミス・デントン、秘密を明かす〉ミス・デントンは何度も会いに行っているにもかかわらず、私のことを覚えていなかった。私が入っていくと「えーっと〇〇大佐？ですよ」と言った。視力もよほど弱ってきていたに違いない。私は名前を告げ、以前にも来たことがあると言うと、「2度も」来てくださって嬉しいわと言ひ、共和黨員か民主黨員かと尋ねた。私たちは共和黨員同士として握手をし、ミス・デントンが以前に会ったことを知っ

ていたが、武間謙太郎¹⁾を知っているかと尋ねた。ミス・デントンは「もちろん知っていますとも。あなたはフィリピンで彼にあったのですか。あんな素晴らしいご一家をご存知と知ってうれしいわ」と、武間夫人²⁾の父上である大澤氏³⁾の大きな肖像画を指差しながら言った。「この方は亡くなるまで、同志社女学校の校長⁴⁾だったのですよ」。次に、白髪のアメリカー人が写っている、それよりも小さい肖像画を指差して、「この人はバーサ・ボスビシエルさん⁵⁾で、ロスに住んでいる私の親友なの。あなたのことを知ると喜ぶと思うわ」と言い、「あなたがまだ独身なら、きつといいお嬢さんを紹介して下さるわよ」と大笑いした。

次に『アメリカの料理本』⁶⁾という料理ブックを取ってくれと頼み、「秘密を教えましょうね。実は、武間家の弟⁷⁾の方は料理が大好きなの。あなたが帰国したら、この料理本をあげるときと喜ぶわよ。星名夫人に先にあげていなかったら、私があげたいくらいよ」とクスクス笑いながら続けた。「昔、この本を彼に貸してあげたことがあったのだけど、取り返すのは大変だったのよ。もう2冊、料理本を貸してあげなければならなかったの」。さらに「武間家では、謙太郎と享次が日曜の朝にはいつも朝食にワッフルを焼くの。日本人はワッフルが大好きなの」とつけ加えた。

ある時、ミス・デントンにプロテスタント信者の後援で孤児院⁸⁾を始めたいと考えている兵士のいることを話した。するとデントンは「孤児院ですって!」としばらく泣いていた。そして、「それなら武間夫人を理事を頼みなさいよ」と言った。ミス・デントンによると、前に京都の外れに孤児院が一つあったが、そもそも市内にはこれまで一つもなかった⁹⁾、とのことだ。

帰ろうとすると、ミス・デントンは最後のお願いだけ「帰国する前に、東京でマッカーサーに会って、日本国民にはいつも親切にするように伝えてね」と言った。

注

① 1945年京都でのクリスマス

- 1) 敗戦後、京都に配置された最初の軍団。1945年9月21日ヘンライン大佐を団長とする進駐軍調査団が先遣隊として入洛し、同年9月25日を進駐予定日と決定。予定通り連合軍第6軍が京都に到着。駐屯地は久世郡大久保村、司令部は烏丸四条下る「大建ビル」。宿舎は都ホテル、京都ホテル、勸業館、市商品陳列所、伏見の兵舎と内定。同年9月28日第6軍司令官クルーガー大将が入洛し、京都は名実ともに米軍の占領下に入った。(立命館大学産業社会学部鈴木良ゼミナール『占領下の京都』文理閣 1991 2頁)

しかし、日本への進駐が予想以上に平和裏に完了したこともあり、マッカーサー元師は第6軍の早期解散を決め、クルーガー大将と彼の軍隊を顕彰して、京都に「クルーガー図書館」を開設。日本人の民主化に役立てることを願って図書520冊が寄贈された。

- 2) ミス・デントンが最期まで過ごしたデントン・ハウスのこと。ミス・デントンの力が隆盛であった頃、「デントンさんの家は、京都の西洋の中心である」とか「彼女の応接間は、ホワイトハウス以外で最も興味深い場所」と言われるくらいの社交場であったが、戦時中の窮乏生活のために、小屋同然であったのだろう。もともとは同志社女学校の最初の校舎(1878年建立、木造)が老朽化のため取り壊され、新しいレンガ造りの校舎に建て替えられたとき、1909年左翼部は平安寮に、翌1910年に右翼部は宣教師たちの住む「教師の家」として、できるだけ元の形を残して、移転保存されたもの。従って、当初この建物には多くの宣教師がミス・デントンといっしょに住んでいた。
- 3) ミス・デントンの日本着任は1888年10月であった。

② 1946年2月25日 京都

1) 大岡牧師 日本聖公会京都聖ヨハネ教会（下京区河原町五条下る）大岡義政司祭（1883-1984）のこと。司祭在任は1941~1963年。戦前、Philadelphia Divinity Schoolで3年間学んでおり、英語は堪能であったので、GIたちは聖ヨハネ教会の礼拝によく出席していた。令嬢とは長女和子で、教会付属幼稚園の教諭であった。

2) 同志社栄光館のこと

3) 厚生事業資金醸集のために開催された第29回朝日名曲定期演奏会「ソナタの午後」のこと。

2月24日午後3時・同志社栄光館／バイオリン：巖本真理／ピアノ：井口基成／曲目：ブラームス第3番・モツァルト第10番・ベートーベン クロイツェルソナタ／入場料：A 7圓 50銭・B 4圓 50銭



京都新聞広告参照。
昭和21年2月21日（木曜日）

4) Abe フィラデルフィア出身の、筆者の同僚の兵士 Arthur G. Abrahams のこと。彼の場合 abrahams は姓であるが、リンカーン大統領等で有名なので、個人の別称としても、よく用いられる。

5) 巖本真理（1926-1979） 巖本善治と若松賤子の孫。母親がアメリカ人であったためにハーフとして差別を受け、病弱でもあったので小学校を中退し、自宅でバイオリンの英才教育を受けた。1937年11歳で、日本音楽コンクールで1位となり、天才少女と呼ばれた。1946年20歳で東京音楽学校教授となるが、1950年辞職して渡米、さらに研鑽を積んだ。帰国後、演奏活動を再開。1959年芸術選奨文部大臣賞を皮切りに次々と受賞、バイオリン奏者第一人者としての地位を築く。乳ガンのため53歳で死去。

6) 光子夫人は河原町五条から今出川まで市電で傘を届けたのである。

③ 1946年5月17日

- 1) Lt. von Reyn 京都駐留先遣隊の団長として入洛した責任者。
- 2) General Woodruff 京都は当初、連合国軍第6軍団の支配下に置かれていたが、45年12月、第6軍団が解散し、46年1月1日から第8軍第1軍団に引き継がれ、司令部も大阪から京都に移された。その初代第8軍司令官がウッドラフ少将であり、48年1月まで京都に在任。（『占領下の京都』2-4頁）ウッドラフ少将とミス・デントンの関係は不詳。
- 3) ミス・デントンの生年は正確には1857年であるが、生前、本人は1858、59年など、平気で間違った歳を書いたり、言ったりしていた。
- 4) ミス・デントンは「1888年9月8日にサンフランシスコを出港し、10月8日に同志社の門をくぐった」とよく言っていたが、正しいことは不明と言われていた（『ミス・デントン—「同志社の宝」と呼ばれた女性の60年—』同志社女子大学・同志社同窓会 2007年、27頁参照）。しかし近年、注釈者により横浜開港資料館所蔵の乗船名簿から、ミス・デントンの乗った太平洋航路はサンフランシスコ出港のオセアニック号（9月8日出港、9月26日横浜港着）であったこと、横浜で乗った神戸行きの船は10月5日発「わたなべ丸」であったことが確定された。（『同志社談叢』36、63頁、2016年）
- 5) 日比恵子は資料に依拠して「ミス・デントンが英学校の教壇に初めて立ったのは、10月12日と考えられる」（『同志社談叢』25、100頁、2005年）としているので、「デントンの『翌朝』に最初のクラスを教えた」というのは思い違いであろう。なお英語を教えたのは予備校であり、女学校では「生理学」を教えた。
- 6) 新島の召天は1890年1月23日で、46歳11月であった。従って、ミス・デントンが生前の新島襄と面識があったのは1年余に過ぎない。

- 7) 岡田氏は筆者の間違い。新島晩年の社長代理は金森通倫であったが、「のちの学長」を勘案すれば、第2代同志社社長（総長）に就任した小崎弘道であろう。来日後数年間のデントンと小崎の交流は密であった。
- 8) 在日 60 年間の歳月としては少ないが、ミス・デントンは1度ではなく、2度賜暇休暇をとって帰国している。1回目は1900年3月～1901年9月（1年半）で、2回目は1917年1月～1918年4月（1年3ヶ月）であった。
- 9) 当時のアメリカ領事は、J.C.Grew（在任 1932-1941）であり、デントンとは着任以来、深い交流があった。
- 10) これは、1946年のクリスマス後ではなくて、1944年12月18日に起こった名古屋の地震の折の出来事である（『ミス・デントン』305頁参照）。
- 11) 星名（末光）久(1874-1954) 愛媛県宇和郡卯之町で生まれる。同志社女学校普通部卒業後、英文科で学んでいたが、1901年中退して、ハワイで伝道をしていた星名謙太郎と結婚。5年後、夫とともにテキサス州に移るが、一家は久の父の病状悪化の知らせで帰国。その後、再び謙太郎はブラジルに出国することになるが、久は2児とともに残留することを選んだ。そして、自活のため松山女学校に勤務していたが、恩師ミス・デントンの強い要請に応じて上京し、デントン宅のすぐ近くに居を構えて、彼女の世話をし同時に女学校の教師を務めた。90歳で見送るまでのミス・デントンに対する彼女の献身は筆舌に尽しがたいが、二人の間には長年にわたって築かれていた異国の女性同士の信頼と友情があったことを見落としてはならないだろう。

④ 日付なし

- 1) *Reader's Digest* 1922年創刊の月刊総合ファミリー雑誌。記事のカバーする範囲が政治と政府、健康、国際問題、ビジネス、教育、ユーモアなど多様であったので、長年アメリカ合衆国で最も発行部数の多い雑誌

だった。

- 2) Tommy 筆者の同僚の兵士。
- 3) 開校に際し、「同志社」と命名したのは山本覚馬であり、意味は「志を一つにするものの共同体」であった。（『同志社百年史』通1、84頁）

⑤ 1946年6月3日

- 1) 末光信三（1885-1971）星名久の末弟。漱石の『坊っちゃん』で有名な松山中学校を卒業後、札幌農学校に進学、農業経済を専攻。当地で札幌バンド出身者を中心とする札幌独立教会員となりピューリタンの信仰を身につけた。米国留学後、東北帝大教授として教えていたが、大正9年同志社総長海老名弾正の招きにより同志社大学予科教授に転任。少年時代から尊敬していた新島襄の人格、信仰、教育精神を同志社で実践した。昭和に入って日本が軍国化する中で軍部の圧力の下、同志社中学校長から同志社高等女学部長に移籍し、太平洋戦争終戦の年の3月までキリスト教主義教育を貫くために同志社「高女部」を存続させた。（注3に続く）
- 2) 左京区下鴨松ノ木町にある現賀茂教会のこと。1927（昭和2）年ごろ下鴨には電車もバスも通っていなかったため、下鴨在住のキリスト者で市内の教会に出席しにくい人々が集まって、マクリン幼稚園の園舎（1927年建立）を借りて日曜学校と夕拝を始めた。最初は同志社教会下鴨集会所と称していたが、末光信三が説教その他ほとんど全てを一人で担当していた。やがて1938年2月には同志社教会から独立して、日本組合賀茂教会として発足した。
- 3) 末光信三が1910年、東北帝大農学部を卒業後に留学したのは、マサチューセッツ州の神学校ではなく、ヴァーモント州ミドルベリーにある米国最古のリベラルアーツ・カレッジの一つ、Middlebury College であり、そこで専攻したのは、英文学と哲学であった（1911-1915）。牧師の資格を得るためには、賀茂教会発足3年後の1941年に、若い神学生に

交じって補教師の試験を受け、6月から主任伝道師に就任。次いで45年3月には59歳で牧師の按手礼を受けて主任牧師となった。

- 4) 正確には、ミス・デントンの友人 Mrs. J.K.McLean (太平洋ウーマンズ・ボード第2代会長) の寄付によって出来たマクリン幼稚園のことで、そこで日曜学校も開いていた。デントンが最も愛した幼稚園。

⑥ 1946年6月8日

- 1) 1946年12月17日付で Jack がミス・ボスピシエル宛に出した書簡によると、1946年4月(日記では、1946年5月17日)に、ヘンライン大佐と筆者が京都駐屯軍 [第8軍の] 第1軍団司令官ウッドラフ少将の特別な要請で、ミス・デントンを訪問したこと、あいにく彼女は風邪を引いて体調が良くなかったとの報告を聞いて、ウッドラフ少将はミス・デントンの診察のために軍医を派遣させたことが分かる。しかも、その時の診断書

“Examination of this 88 year old woman revealed evidences of heart disease without failure. She is not actually ill, but represents old age with a number of mild to moderate complaints. She may live 6 to 8 months in her present condition or may die suddenly from heart failure or some infection such as pneumonia.”

を、そのままミス・ボスピシエルに書き送っている。その結果、何種類かの薬をデントン・ハウスに届けて服用法を星名夫人に指示したこと、そのとき以降、毎週の軍隊食を彼女に届けることを少将が命じたことも報告している。

⑦ 1946年6月16日

1) 敗戦前後の同志社教会の状況を簡単に記述しておく。1940年から同志社教会の牧師であった星野三雄は45年2月に東京の城南教会に赴任し、以後教会は無牧のままで、礼拝場所も同志社チャペルからクラーク神学館礼拝堂に移っていた。実際には、キリスト教弾圧の下で、礼拝出席者もわずか3名というときもあったが、牧野虎次総長、大塚節治教授、南石福二郎執事が交代で説教を担当しつつ、主日礼拝は固く守っていた。

しかし敗戦後、伝道が可能となった時点から、同志社教会は急ぎ総会を開いて、大阪九条教会の茂義太郎牧師の招聘（1945年11月11日就任）を決め、次々と復員してくる学生たちへの伝道を開始した。礼拝場所も1946年5月26日の新入生歓迎礼拝から栄光館ファウラー講堂に移し、説教も茂牧師だけでなく、牧野虎次総長、有賀鉄太郎・大塚節治教授らが担当した。（同志社教会史編集委員会編『同志社教会1945-1980』2006年 11-15頁参照）

2) 牧野虎次（1871-1964）の間違い。第11代同志社総長（1938-1947）で、滋賀県出身。1925年同志社英学校卒業後、日本各地で教師、伝道師として働いてから、イエール大学に留学。帰国後は、聖俗ともに重要な役職に就き、戦前・戦中の大変な時期の同志社で総長としての重責を担った。この日は栄光館に移って4週目であり、説教は牧野総長の担当であったのだろう。

⑧ 1946年7月4日

1) 本当は89歳である。

⑨ 1946年7月13日

1) Zillig 筆者の同僚の兵士。

2) ミス・デントンは、家庭科以外に、聖書と英語を教えていた。

- 3) ミス・デントンは、料理の時間の後には、その時間に作った料理のレシピを絵入りで書いたノートの提出を課していた。女子大学史料室には数人の卒業生からのノートが寄贈されている。その中の1例をグラビアに掲載。

⑩ 1946年7月19日

- 1) Wallie ロスアンゼルス出身の、筆者の同僚。Wallace Illingworth 2等軍曹のこと。(Jack's letter to Bosbyshell 1946.12.17 より判明)
- 2) Miss Mary Henderson 詳細不明 (ロスの公立学校の校長)。ミス・デントンも来日前は、パサデナの小学校の校長であったが、当時からの知り合いとみなすよりも、第1回の休暇で、日本伝道の報告をするために、ロスアンゼルスを訪れたときに知遇を得た女性と考えるのが妥当であろう。
- 3) the Congregational Church in Los Angeles ミス・デントンが生まれたのは、カリフォルニア州の北東部のネバダ郡であり、教育を受けたのも教えに行っていたのもその周辺の開拓地であった。また高校を終えて進学した Poston Collegiate School の所在地もオークランドであり、その後、パサデナで校長をしてから日本に来るので、それまでにロスアンゼルス教会との接点はないと考えられる。

したがって、デントンが自分の母教会はロスアンゼルス教会の会衆派教会であると言ったのは、第1回休暇で帰国した際に、長くロスにとどまり、その教会で大変世話になり、その後の支援も受けるようになったので (Denton's letter to J.S.Barton, 1901.2.22)、その時に転入会したのかもしれない。

- 4) shredded wheat アメリカで1893年に最初に製造された全粒小麦を粉砕して枕型のビスケットにしたもの。典型的な朝食用のシリアル。
- 5) ウッドランド少将の指示による。(日記⑥注1参照)

6) 星名謙一郎と久の長女で、江上幸子（1908-2010）のこと。義理の娘ではなく、実の娘である。幸子は、1929年同志社女専英文科を卒業すると、英国（London: Royal College of Music）に2年間留学、帰国後結婚し3児をもうける。

敗戦後、疎開先から京都に戻り、ミス・デントンの世話をする母を助け、1946～60年の間は同志社女子中高英語科の教諭を務める。ライフワークとなったのは、YWCAでの働きで、1947年京都YWCA会長就任を皮切りに、1985年まで国内外のYで活躍する。晩年はミス・デントンの語り部となり、同志社女子部のために生涯を捧げたミス・デントンの生き様を語り伝えた。ピアノの他に刺繍にも長じ、2005年には教え子の出版社から『無心のときを求めて—96年の記録—』を世に出した。

7) 江上夫妻には2男（^{やすし} 綏・^{あきら} 煌）・1女（^{きよこ} 洌子）がいる。当時デントン・ハウスには母と子ども3人が住んでいたのだが、Jackの目には2人と映っていたのであろう。

8) 江上幸子の夫、江上波夫（1906-2002）のこと。山口県出身で東京帝大東洋史学科卒。東京大学東洋文化研究所教授を経て、東大名誉教授。考古学者で、騎馬民族制服王朝説などを発表。文化勲章受賞。

⑪ 日付なし

1) 武間謙太郎（1922-2012）武間享一と富貴の長男。インドのカルカッタ生れ。同志社神学校を卒業後、海軍大尉としてフィリピンに従軍。現地で敗戦となり帰国してからイエール大学大学院で神学を修め、1952年に卒業。帰国後は、1954-96（内71-76は在外）年の長きにわたって、東京、中目黒教会の牧師を務める。

2) 武間富貴（1899-2004）同志社女学校専門学部を卒業（1919）の翌年、武間享一と結婚し、2年半の間、インドのカルカッタに滞在。1932年から同志社及び同志社同窓会評議員を務め、1941年から76年まで同志社

同窓会長在任後、同志社同窓会名誉会長。その他、同志社幼稚園長、同志社理事などを歴任。1978年、同志社大学から名誉文化博士号を授与された。

- 3) 武間夫人の父は大沢徳太郎であるが、ここでは、祖父の大沢善助(1854-1934)のこと。筆者またはデントンが間違っただけであろう。善助は幕末の京都に生れ、父は親分格の狭客だったと言われているが、父の大親分に当たる大垣屋(大沢)清八の養子となる。20歳代で白米商を営んでいた頃、得意先に同志社寄宿舎があったことから新島襄と出会い、新島から洗礼を受けて熱心なクリスチャンとなる。その後、大沢家は養父母も含めて、全員が信者となった。

善助は社会的にも京都府会議長、市議員などにも選ばれ、京都商工会議所の副会頭は5期10年務めて地元の経済界にも貢献した。同志社との関係で言えば、1885年新島の懇請を受けて同志社社員(理事)、同志社女学校幹事となり、「明治18年事件後の女学校」の経営面の立て直しに尽力した。

- 4) ミス・デントンの思い違いで、大沢善助が女学校の校長になった事実はない。
- 5) Miss Bertha C. Bosbyshell (1876-?) South Pasadena 出身でミス・デントンの20歳弱年下の大親友。ロスではなくパサデナに住んでいた。ミス・デントンに逢うために、短期間であったが何度か来日し、同志社女学校で宣教師として教鞭をとった。1967年、女子大学が大学院を設置したとき、クレアモントカレッジ大学院への1年間の奨学金(往復旅費、生活費は自己負担)を設け、3年間3人の奨学生を支援した。
- 6) Fannie Merritt Farmer 著 *The Boston Cooking School Cook Book* (Little, Brown and Company Boston: 1938) のことであろう。書名の“The”がイタリックになっていることから、当時料理本の定本と認識されていたことが分かる。この料理本は「デントン文庫」(同志社大学

図書館所蔵)に2冊残されており、そのうちの1冊には、“To Mrs. Hoshina, M.F.D. 1935”の献辞がある。(この書に関しては『ミス・デントン』309-310頁の中でも、武間少年とのエピソードとして記述されている。口絵iii参照)

- 7) 武間享次(1926-2010) 武間享一と富貴の次男。兄と同じく、同志社大学神学部卒業後アメリカに渡り、イエール大学大学院でキリスト教神学と文化人類学を専攻。その間、バーモント州の教会で牧師を務め、1955年イエール大学大学院卒業と同時に、米国長老派教会全国本部の青年部世界交流委員会の主任主事に就任し、世界各地を歴訪、青年指導者の育成・交流に当たった。ニューヨーク同志社会を設立し、同志社の本部とニューヨーク支部との繋がりを強める役割を果たした。長年、日米の架け橋としての貢献で、日本の外務省から表彰されている。
- 8) デントン自身は関係していないが、生活保護法による保護施設(戦災孤児収容)であり、Jackが帰国した後、この兵士にプロテスタントの牧師が協力して開設していた「デントン孤児院(葵少年寮)」のことであろう。所在地は左京区田中上柳町35、1946年12月20日から1948年3月31日まで1年3か月余、続いたようである。(『京都市児童福祉百年史』1990年 448頁参照)
- 9) 京都市内に孤児院が一つもなかったというのは、デントンの思い違い。日本には、奈良時代から孤児院の歴史はあるが、京都でも、カトリックでは、明治19年には「京都センタンファンズ(天主教女子教育院)」が、仏教では明治22年に「平安徳義会」が設立されていた。(『京都市児童福祉百年史』35頁参照)

Jack's diary

① Kyoto, Christmas 1945

16. Dear Lady of Doshisha: One by one we* filed into a cottage behind the main buildings of Doshisha Girls' School. In a single room of the cottage a single light glimmered dimly from the ceiling. A very old white woman lay upon a bed, her head against the pillow. This old woman had come to Japan 57 years ago from California. Now old, crippled, and partially deaf she listened as we sang in a semi-circle before her. At the conclusion of each hymn she cried in a broken voice full of praise and appreciation, "Oh, Beautiful, Beautiful, Beautiful!" Only once was she able to express herself in another way. She smiled—there was a twinkle in her eye—and said she had always preferred a male choir.

* This is presumably the 6th Army choir

② 25 February 46

26. Doshisha Concert: Sunday afternoon Rev. Ooka and Miss Ooka took Abe and me to a program of violin and piano music at Doshisha University. In the auditorium there were about 500 Japanese and only 4 GIs. The seats were surely made for Japanese, for Abe and I could not put our feet flat on the floor we were so cramped. The program was Brahms, Mozart, and Beethoven. Mary Iwamoto, the violinist, was pretty in her dress and sweater. Before the program ended, Mrs. Ooka rushed in to give us two umbrellas for it was now raining outside. From home she had come two miles on crowded streetcars so that we wouldn't be wet.

③ 17 May 46

61. Miss Denton: Lt. von Reyn and I visited Miss Denton at Doshisha University on 17 May at the request of General Woodruff. Miss Denton told us that she was born in the state of California on the 4th of July, 1858. She came to Japan expressly to devote her life to Christian teaching. Arriving in Kyoto one afternoon in 1888, she taught her first class, an English class, at Doshisha the next morning. At that time there were fewer than one hundred students at the school. She knew Joseph Hardy Nishima, the founder of Doshisha, but he died at a very young age. Mr. Okada, who was a dean of the school at that time (later its President), taught her “many good things.” Miss Denton, who has been abed with a “nervous illness” the last two years, has fond reminiscences of the school, its students, and its leaders. Only once has Miss Denton returned to the United States since her arrival in Japan 58 years ago. She has many relatives in New York State. She is a “good Republican.” She likes American soldiers and their “beautiful blue eyes.”

She doesn't know what caused the war. “Perhaps the Japanese were jealous of the Americans.” In 1941, Miss Denton chose to remain in Japan even though all Americans had been ordered out of the country. She loved Japan and its people. The American Consul at first told her she was foolish not to return to the States but when he understood her earnestness, all he could say was “God bless you!”

Shortly after Christmas of this year, Miss Denton felt an earthquake tremor as she lay in her bed near the window. She next felt something heavy—not a blanket—on top of her. Later it was learned that her life-long Japanese companion, Mrs. Hoshima, had thrown her body over Miss

Denton to serve as a shield from broken glass should the window break. "That is the devotion I have received from these people ever since I came to Japan." She believes that Japanese are very easy to understand; they are "very simple". Sukiyaki, she believes, "is a food for the world." However, "Japanese girls want to learn foreign cooking," she said, "so that they can cook for the soldiers."

④ 'no date'

64. Miss Denton: I took a package of parsnip seeds and a Reader's Digest and Tommy took some tomato juice and a pair of winter pajamas. Miss Denton declared that the pajamas were the very thing that she had wished for. "Mrs. Hoshina, Mrs. Hoshina," she cried, "please see that I wear these fine pajamas tomorrow—tomorrow is Sunday, isn't it?" Miss Denton asked that if by giving her the food we would not short ourselves. She insisted that we tell Mrs. Hoshina that she must also share the food we had brought. Miss Denton gave each of us a picture of herself and a Japanese Christmas card. She told us the meaning of Doshisha. It means one wish and that one wish is that "God may be glorified." I have never seen a woman so full of trust, faith, and religious fervor. She constantly talks of her Japanese friend. "Everyday," she says, "I see some beautiful quality in Japanese character!" Truly she is a beautiful woman herself.

⑤ 3 June 46

78. Japanese Church Service, June 3: Abe, Tom, and I went to Rev. Suimitsu's little church in the northernmost part of Kyoto. (Rev. Suimitsu is the brother of Mrs. Hoshina who cares for Miss Denton.) This minister

spent three years at a theological school in Massachusetts. The Sunday service was held in the little Sunday school room which Miss Denton had once donated. In the little room there were only about 20 present. Rev. Suimitsu, of course, delivered his sermon in Japanese, but for our benefit he often translated into English the points he was making. I was impressed by the fact that in this little service, everyone took part in some way. One young lady played the piano for the hymn singing, a young Kyoto University student read the scripture lesson and offered a prayer. After the service, everyone removed the chairs we had been sitting upon and before leaving the church replaced them with a circle of little kindergarten chairs.

⑥ 8 Jun 46

70. **Miss Denton:** I delivered vitamins, nose drops, cough medicine, and some kind of nerve medicine to Miss Denton which the army doctor had recommended after examination. I told Miss Denton that it was largely due to General Woodruff's interest in her that the medicine could be supplied. She said, "Please thank him for his goodness. Tell him that I love all the American boys that come to see me. Tell him how much I love Japan, but say that I love America a little bit more."

⑦ 16 June 46

73. **Sermon at Doshisha:** On June 16th, Abe and I went to Fowler Chapel at Doshisha to hear a Japanese sermon. Although we could follow the minister, Dr. Marino, a bit at times, we were convinced the Japanese language could not be learned in three months! None of the five hymns sung at the service were familiar ones to us, but we hummed the melody

from the hymnal. After the service, Dr. Marino spoke to Abe in perfect English; he had spent three years at Yale. The congregation consisted of about 100 teen-age girls, 25 teen-age boys, and 25 adults. I was much impressed by the fact that no one appeared to be at all restless; full attention was given throughout. I think that this can be attributed to the strict discipline enforced in all Japanese schools. A Japanese student is made more aware of the honor and respect due to his school than to his own individuality and future.

⑧ 4 July 46

79. **Miss Denton's Birthday:** Today, Independence Day, is also Miss Denton's birthday. She is 88 years old. Tom, Abe, and I wrote her a small birthday greeting and a Pocketbook of her favorite author's works, those of Shakespeare. I took it to her and found that many people had visited her in the day. There were many beautiful bouquets of flowers all about the room, and many presents on the table.

⑨ 13 July 46

89. **Home Economic Workbooks:** Saturday afternoon, July 13, I went to see Miss Denton with my friend, Zillig. Miss Denton is noticeably losing her memory. She always encourages "her soldier boys" to borrow some of her books. She doesn't realize, of course, that we have access to a fine army library. Miss Denton was a teacher of home economics at Doshisha. She showed us several notebooks of her students. The girls had pasted clippings from food advertisements, made paintings and drawings truly artistic, to illustrate the recipes copied very painstakingly in English. Miss Denton said that her "Japanese girls were anxious to learn foreign

cooking, so that they could cook for the soldiers.”

⑩ 19 July 46

93. Corn Flakes for Miss Denton: Saturday afternoon, 19 July, Tom and I took Wallié to see Miss Denton. Previously Miss Denton had asked whether we knew any soldier whose home was in Los Angeles. Wallie lives there. Miss Denton gave Wallie the address of one Miss Mary Henderson, a principal of one of the public schools in Los Angeles. Before the war, Miss Henderson collected cookbooks for Miss Denton's Doshisha home economics classes. Miss Denton also asked Wallie to call on the Congregational Church in Los Angeles, “her church.” “Tell them”, she said, “that I have never regretted my decision to remain in Japan through the war.” She told Wallie that he might find several of her nieces and nephews there; she didn't know where her relatives were anymore.

I gave Miss Denton a package I had brought her. I told her it was cereal. She didn't understand. I opened the parcel, took out the small box of cornflakes and she immediately clapped her hands over the cornflakes. She became very excited, “Oh! Oh! Cornflakes Mrs. Hoshina, come here. Hoshina-sense! Where are you, Mrs. Hoshina?” Mrs. Hoshina came running in. “Yes, Miss Denton, I am here.” “Look!” cried Miss Denton, “Please prepare this for my supper tonight, Mrs. Hoshina.” Next she took out the box of rice flakes and shredded wheat. She was excited like a child. “I never thought I would shed a tear over shredded wheat” she laughed. Miss Denton is fond of cold cereal, for she had invented a kind of cold cereal from rice and wheat. Abe, Tom, and I had saved our boxfuls from the army mess. Miss Denton continued, “I often tell Mrs.

Hoshina that I am the best fed person in Japan, because I am fed by the American Army!" (Miss Denton receives a fish and fruit ration each week.) The daughter-in-law of Mrs. Hoshina is now helping with the care of Miss Denton. She is the mother of two little children whose father is in Manchuria.

⑪ no date

108. Miss Denote Tells a Secret: Miss Denote didn't remember me—even after all the times I had seen her. She said as I entered, "Are you Colonel—, Colonel—?" Her eyesight must be failing, indeed! I told her who I was, adding that I had visited her before. She said she was glad that I had come to see her "a second time". She asked me whether I was a Republican or a Democrat. After shaking hands as Republicans, I asked her if she had seen Kentaro Buma. (I knew well that she had.) Oh, yes! Did I meet him in the Philippines? She said she was happy that I knew such good people. She pointed to the huge portrait of Mr. Ozawa, father of Mrs. Buma; Mr. Ozawa had been a principal of Doshisha Girls' School until his death. She also pointed to a smaller portrait of a white-haired American lady. That is Miss Bertha Bosbyshell, she said, a dear friend of hers in Los Angeles. Miss Bosbyshell would be glad to know me, she said. "If you are not already married, she will get you a nice girl!" she laughed. Next she asked for a certain cookbook, the American Cook Book. "I will tell you a secret, she said. "The younger Buma son is very fond of cooking "When you return to America, you can make him happy by sending this cookbook to him. I would give this one to him if I had not already given it to Mrs. Hoshina. She chuckled as she continued, "I once loaned him this cookbook, and I had to loan him two more cookbooks to

get this one back!" She added that in the Buma home Kentaro and Kyoji make a breakfast of waffles every Sunday morning. "Japanese people are very fond of waffles," she said.

I mentioned to Miss Denton the desire of some soldiers to start an orphanage under Protestant sponsorship. "An orphanage!" She cried for a minute. "You will make Mrs. Buma a trustee, won't you?" She said that there had been an orphanage out in the country, but that Kyoto itself had never had one. Before I left, Miss Denton had a last request, "Before you go to America, see MacArthur in Tokyo and tell him to be always good to the Japanese people!"